

## 名付けと文字表記の政治学

## ■ヤナギダさんとヤナギタさん

先日、電車が東横線の渋谷駅に滑り込もうとした時の事だ。最後の音節が下がる「シブヤ↓」（と仮に表そう）のアナウンスが車内に流れた。「しぶや↑」と最後の音節が上がるのが通例で、後にも先にもない経験だった。ふと、アナウンスしたのは私の同郷人かな、という思いが頭を過った。富山（「トヤマ↓」ではなく「とやま↑」）では、渋谷という人名は例外なく「シブヤ↓」というアクセントになるからである。少なくとも西日本の出身だろうと思う。

30年も前、上京して間もない頃の事。顔見知りの小学生たちが、犬を「イぬ↓」と呼ぶ私のアクセントをひどく面白がったものだった。

柳田国男は、ヤナギダと呼ばれると、ヤナギタだと訂正する事があったという。また、民俗学者の福田アジオ氏はフクタさんで、フクダさんではない。同様に、中島さんは、西日本ではナカシマさんとなるのが普通である。

## ■表音文字と表意文字

上に見たように、漢字は意味を表すものの音価を厳密に指定しない事実を、日本人の誰もが経験的に知っている。とはいえ、漢字表記が包み隠している音声的な差異には諸々の次元がある。小川さんはオガワさんかコガワさんか、小山さんはオヤマさんかコヤマさんか分からない。この場合、オとコの間の音声上の差異は、子音の有無によるもので、軽微ではない。フクダさんとフクタさんの場合も、「ダ／タ」は音声的にばかりでなく日本語の音素としても異なる。それは有声音と無声音（dとt）の対立である。ただし、世界を見渡すと、有声音と無声音が音素的な対立をなさない言語も珍しくない。

また、四声がある中国語などとは異なり、日

本語は、通常は声調言語とは考えられていない。しかし、実際には、大概の地方で橋と端、海と膿など、同音語でもアクセントが逆転して意味的な対立が導かれている場合が少なくない。ただし、舞台俳優はともかく、市井人なら、同一品詞の同音語をもたない犬のような単語の場合、アクセントが「いヌ↑」でも「イぬ↓」でも大過なく日常生活を営んでいける。

ところが、日本の人名を表音文字であるアルファベットで表記する時に、「シブヤ↓」と「しぶや↑」のような声調上の差異は別として、漢字表記が覆い隠していた音素的な差異が一気に表面化してしまう。そして、OyamaとKoyama、FukudaとFukutaが混同される可能性は、ずっと小さくなる。その一方、小川が尾川と、小山が湖山と混同される可能性がにわかに浮上する。

問題はそればかりではない。大山を一体どうアルファベット表記すればいいのだろうか。Oyamaだろうか。尾山や小山との混同を避けるにはŌyama、Ohyama、Ouyama、Ooyamaの方が望ましい。だが、そのどれが一番相応しいのか。実は、日本語をアルファベット表記する際の正書法（orthography）はまだ確立していない。

## ■文字表記という不幸

日本語は、漢字に平仮名と片仮名を組み合わせた独特の文字表記の体系を発達させた。その日本語がグローバリゼーションによって直面したアルファベット表記の問題は、最近まで文字を持たなかった多くの民族社会の現在を考える場合に、様々な示唆を与えてくれる。

文字がもたらされると、無文字の民族社会に思いも掛けない大きな政治的な変化が兆す事が少なくない。西南ケニアの赤道直下の高原地帯に相隣り合って住むキブシギス人とナンディ人

の場合がその好例だ。彼らは、数世紀前に単一の母集団から分岐したという歴史伝承を共有し、「我々是一つ」という強い連体意識を維持してきた。文化がよく似、言語も方言といえる程度の差異しかなく、十分によく通じ合う。両者は、歴史上一度も戦った記憶をもたず、英国植民地政府にも一致して強く抵抗した。

ところが、第2次大戦後間もなく民族語による出版物が刊行されるようになると、困難な問題が起きる。両民族が、相手側で出版された本や新聞を理解できないといって、相互に拒否しだしたのだ。アルファベット表記が統一されていなかったゆえである。両民族は、やがて別々の言語をもつとさえ主張するようになり、それは、民族的な独自性の主張にまで発展した。文字表記という近代化の一課題が、知り得る限り、歴史上初めて、両民族の強固な政治的連帯に深刻な亀裂をもたらそうとしていたのである。

### ■正書法と民族の統合

実は、これと多少とも似た状況は、ケニア各地で発生していた。19世紀末から20世紀初頭にかけて東アフリカにキリスト教が浸透したが、その担い手は欧米から送り込まれた諸々のミッシヨナリーだった。「ミッシヨナリーの時代」の大きな特徴の一つは、複数の会派のミッシヨナリーが同一の地域に競うように入り込んだ結果、信仰する会派を人々が複数の選択肢から選べた点にある。そして、この事情は、特定の人間集団の内外に思いがけない亀裂と対立を生み出す事にも繋がった。しかも、その重要な原因の一つは、各会派が同一の言語に当てはめた別々の正書法に起因する混乱だったのだ。

しかし、キプシギスとナンディの場合、対立の原因をミッシヨナリーに帰する事はできない。なぜなら、彼らの土地での宣教は、実質上、アメリカ南部からやって来たアフリカ・インランド・ミッション (AIM) という単一の会派が行ったからだ。むしろ、欧米由来の新たな価値への接近を約束する、文字という強力な手段を独

占すべく、両民族のエリートたちが偏狭な文化ナショナリズムに訴えたと見るべきだ。

両民族は、解決のために「ナンディ・キプシギス言語委員会」を結成して、両言語を共に尊重しつつ文字表記を統合し、それに従う印刷物を相互に自由に流通させる事を認めあった。そして、この和解を契機に作られたカレンジン (Kalenjin) という新たな民族概念が、両民族だけでなく近縁の隣接民族を統合する、新たな民族形成の文化表象となっていった。

### ■名前で民族が分かる

キプシギス語やナンディ語を初めとする南ナイル (カレンジン) 諸語では、有声音と無声音、つまり b/p、d/t、g/k、j/ch、z/s は音素としては対立しない。実は、当初の正書法の差異を巡る両民族の対立を導いた要素の一つは、上に示した各対のうち、どの字母を各単語の表記に採用するか判断にあった。その統一は、音声的な妥当性の判断ではなく、相互の慣用を部分的に認め合う妥協の産物だった。

ただ、個人名の表記は統一されなかった。例えば Koske[-i]、Geske[-i]、Kosge[-i]、Gosge[-i] は皆同一の男性名の異なる表記だ。どれも同じように発音される。しかし、キプシギスでは Goske と、ナンディでは Kosgei と綴られるのが一般的だ。また、女性の幼名には女性接頭辞 Chep- がつく、今でもそれらの名前は、キプシギスでは Chep-X、ナンディでは Jep-X と表記されている。だから、これらの綴り字から、名前の主がキプシギス人かナンディ人か、ほぼ正しく見当がつく。

導入当初に文字をめぐって作られた両民族の異なる文字伝統の一部が今もこうして生き続けているのは、名前が個人のアイデンティティに最も深く関わるものであり、それゆえ、正書法の統一によっても容易に干渉できない領域だからだ。この事情についてもまた、日本の人名をめぐる状況が示唆を与えてくれるだろう。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)